

部活動の持つ可能性を探って、手作りの全国大会開催で夢への挑戦
～東日本大震災から剣道でできる復興と地域貢献～

福島県立白河高等学校
教諭 佐藤 裕 展

「まずはじめに」

私は2010年4月に白河高校へ着任し、2021年4月から2024年3月まで白河高校と同じ敷地内にある夜間定時制の白河第二高校に勤務し、2024年4月に再び白河高校に赴任し今にいたります。夜間定時制に勤務している時には外部指導者の立場でありましたが、白河高校剣道部の指導には16年間携わっています。赴任した2010年度の沖縄インターハイにおいて女子団体がベスト8になり、そこから新型コロナウイルスの影響でインターハイが中止になった2020年度を除いて、白河高校は男女団体個人の違いはありますが15年連続でインターハイに出場しております。2010年のインターハイ出場が白河高校剣道部として50年ぶりのインターハイ出場でしたので、そこからここまで全国の舞台で戦い続けることができるとは正直思っていませんでした。さらには全国の舞台でも男子団体がインターハイでベスト16が1回、女子団体がインターハイでベスト8が3回、ベスト16が2回という成績を残せたのも、白河高校が地域に根ざした歴史のある進学校としての魅力を持つことと、生徒や保護者に恵まれたことの結果だと思っております。同時に未だ成し遂げられてはいませんが、本当の意味での文武両道を目指し、難関大学進学と高校剣道日本一への挑戦はまだまだ続けて行くつもりです。



「2011.3.11 東日本大震災」

赴任して1年目の終わりにあたる2011年3月11日14時46分に東日本大震災が発生しました。3月末に春の全国選抜を控え、前年のインターハイベスト8のメンバーがほぼ全員残っていた白河高校は優勝も狙えると生徒達も感じ練習に取り組んでいる最中でした。あまりにも大きな地震にただただ驚き、恐怖を感じたことを今でも記憶しています。その日から全ての活動が停止し、放射線の恐怖と向き合いながらもとにかく無事に生きることを第一に3月終わりまで過ごしました。県外に避難していた部員も少しずつ自宅に戻ってきましたが、剣道の練習をすることはなく、何人かの剣道部員と一緒にボランティアとして地域の瓦礫片付け、水道水の運搬などをおこなって過ごしていました。片付けをしていると住人の方から「何部？」と聞かれ「剣道部です」と答えると「がんばってね」と声をかけていただくことが何度も続きました。それでも、こんな大変な時に剣道なんてやってて良いのかという考えが自分の頭の中にはありました。それでも、繰り返し地域の人から声をかけられ、「子どもたちには未来を見て、夢を持って過ごして欲しい」とある老夫婦に声をかけられた時に急に自分の中で「よし、生徒たちと一緒に剣道をしよう」と思ったことを覚えています。この時に「震災にまけてたまるか」とその思いが生まれたように感じています。

「人を集めるために福島県で高校剣道の全国大会開催」

その後、通常の活動とはいかなくても剣道の練習を再開しました。久しぶりの剣道ということもあって、動きは決して良くないのですが、生徒たちの表情が今まで見たことがないくらいに生き生きしていたことを覚えています。震災で人の命に直面し、放射線という見ない恐怖と戦っている最中だが、建物や道路が元通りになることが復興ではなく、生徒たちが未来や夢を語り、将来に向けて生き生きとがんばってこそ本当の復興になるとその時に感じました。そのようなことを考えて1年が過ぎようとした時に全国の練習試合などをおこなっている各都道府県の先生方から福島県で高校剣道の全国大会を開いたらどうだと話があり、大会があることで福島県に全国から人が集まれば、宿泊し食事をして地元の経済効果にもつながり、福島県の学校を条件無しのオープン参加にすれば全国クラスを体験でき競技力向上にも役立つのではと話をしていただきました。また、福島県の現状を知ってもらい、他の都道府県から来県した生徒達に災害とは何か、その時にどんな行動をしたら良いのか、どのようなことに注意したら良いのかを知ってもらえる機会にもなると感じました。さらには剣道で訪れた福島県ですが、美味しい食べ物や観光地を知ってもらえれば、再び来県いただけることにもつながり福島県の活性化に役立つと感じました。これが『東日本大震災復興祈念 第1回登龍杯争奪全国高校選抜剣道大会』の始まりでした。あれから令和7年8月の開催で第14回大会と大会を続けて来ました。ここまで続けてくる上で考えたことや工夫してきたポイントを以降に示します。

「実践の内容及びその方法、成果と今後に向けての課題」

① 大会開催の基盤づくり

手作りの全国大会を開くにあたって、ただ自分たちだけで勝手に開いたのでは自己満足だけで終わってしまう可能性があると思いました。福島県をはじめ各団体に認知していただき、支援をいただきながら開催して行くことが全国への発信、そして継続に大きく影響すると感じました。主催は登龍杯実行委員会です。白河高校の学校長に会長をお願いし、私が長年実行委員長をおこなっています。委員の内訳は、白河高校剣道部の保護者と福島県高体連剣道専門部の有志の先生方です。今では、後援として、復興庁、福島県、福島市、福島県教育委員会、福島市スポーツコミッション、福島県剣道連盟、福島県剣道連盟白河支部、白河高校同窓会、白河高校剣友会に大会開催に向けてご協力をいただいております。

第1回から第9回大会までは白河市で開催していましたが、参加校が徐々に増えて来て大きな体育館での開催と宿泊場所の確保が必要となった時にたまたま中学校側でも同様の全国大会を開催したい話があり、現在の福島市をメインとした開催に変遷してきました。少しでも多くの人に福島県を知ってもらいたいという最初の開催理由を第一に判断しましたが、白河の地で再びという想いもあります。今後も開催場所については検討を重ねたいと思っております。福島県内のいろいろな市町村で実施することも福島県を知ってもらうためには効果があるとも思っています。

② 高校剣道日本一の学校を招待 ～本物を知ることの大切さ～

次に私がこだわったのは、福島県の高校生に高校剣道の最上クラスつまり日本一を体感させるということです。何の世界でもそうだと思いますが、本物を知ることで自分の世界が変わることがたくさんあります。そして剣道の世界でトップを知ることで、剣道以外にもそのような意識を持ってもらえれば、福島県の高校生が高校時代の部活動だけではなく、将来大きく社会に貢献する人間になれる可能性が生まれると考えました。高校剣道の強い学校は全国各地にたくさんあります。その中でも高校剣道の日本一を成し遂げた学校に来県いただくということで今でも九州から熊本県九州学院高校、福岡県中村学園女子高校、長崎県島原高校には来県いただき、素晴らしい剣道と同時に剣道に対する取り組み方、行動や振る舞いなど多くのことを勉強させていただいております。同時にそれらの全国トップといわれる学校が参加してくれることで福島県以外の都道府県からもさらには韓国からも参加してくれる学校が増え、今にいたります。

③ 剣道の大会に参加することで災害学習と福島県のアピール活動

剣道の大会ではありますが、剣道だけで終わらず、+αで違うことも学べる機会にしたいと考えました。

登龍杯ではプログラムに災害時の対応について毎回違うことを記載するようにしています。最近では、毎年いろいろな場所で今までにないと言われる大きな災害が発生しています。この取り組みによって一人でも多くの命が救われたり、被災者が減ってくれたら嬉しいと想像しながら作成しています。また、福島県の美味しい食べ物や観光地などを紹介することもおこなっています。高校生の選手が来県するのはもちろんですが、その保護者など選手以外の方も必ず来てくれます。その人たちにも福島県をアピールすることは福島県の発展に大きく関係すると思っています。今度は剣道ではなく旅行として来県してくれたり、美味しい食べ物を知ってもらい、それを食べるに、購入に来てくれたり、インターネットで取り寄せてくれたり、福島県には知ってもらえれば喜んでもらえることはたくさんあります。それを部活動の取り組みとリンクさせて行くただの競技力向上だけではなく、地域貢献につながってくると思っています。人が集まる場所にはその可能性があると感じています。だからこそ、多くの人が集まる大会となるよう工夫する意義があると思っています。また、観光地含めお店などの紹介については公式に自治体や観光課、報道関係で案内している資料を使い案内しております。これについても、大会の基礎となる後援をいただいている各団体の存在が大きいと感じております。今後さらにその地域の人達だけで共有している隠れた名店などをいかに案内していくかが課題と感じています。

<h4>災害に備えて 2025</h4> <p>近年、世界各地で大きな地震が起きています。6月頃からカラオケ英語教室で練習が開始している。音感やリズム、いつどこで起こるかわからない自然災害は、日常から対策をしていかなければなりません。</p> <p>災害が起きたとき、正しい理解がまず必要です。正しい知識がなければ、正しい行動も取れません。この災害は自然災害と異なり、事前に準備ができておらず、予測が難しいのが特徴です。事前に準備ができておらず、予測が難しいのが特徴です。事前に準備ができておらず、予測が難しいのが特徴です。</p> <p>1. 災害に備える - 地震発生時の対応 - 避難経路の確認 - 避難場所の確認 - 避難用品の確認 - 避難時の行動指針の確認</p> <p>2. 避難時の行動指針 - 避難開始のタイミング - 避難経路の確認 - 避難場所の確認 - 避難用品の確認 - 避難時の行動指針の確認</p> <p>3. 避難後の対応 - 避難後の行動指針 - 避難後の対応 - 避難後の対応 - 避難後の対応 - 避難後の対応</p>	<h4>【災害時の命を守る行動】</h4> <ol style="list-style-type: none">1. 避難開始のタイミング - 地震発生時の対応 - 避難経路の確認 - 避難場所の確認 - 避難用品の確認 - 避難時の行動指針の確認2. 避難時の行動指針 - 避難開始のタイミング - 避難経路の確認 - 避難場所の確認 - 避難用品の確認 - 避難時の行動指針の確認3. 避難後の対応 - 避難後の行動指針 - 避難後の対応 - 避難後の対応 - 避難後の対応 - 避難後の対応 <p>このように、災害時の命を守る行動は、避難開始のタイミング、避難経路の確認、避難場所の確認、避難用品の確認、避難時の行動指針の確認です。</p>
<h4>災害に備えて 2024</h4> <p>近年、全国各地で地震や自然災害が起きています。2024年になってから、特に大きな地震が全国各地で発生しています。自然災害は、事前に準備ができておらず、予測が難しいのが特徴です。事前に準備ができておらず、予測が難しいのが特徴です。事前に準備ができておらず、予測が難しいのが特徴です。</p> <p>1. 災害に備える - 地震発生時の対応 - 避難経路の確認 - 避難場所の確認 - 避難用品の確認 - 避難時の行動指針の確認</p> <p>2. 避難時の行動指針 - 避難開始のタイミング - 避難経路の確認 - 避難場所の確認 - 避難用品の確認 - 避難時の行動指針の確認</p> <p>3. 避難後の対応 - 避難後の行動指針 - 避難後の対応 - 避難後の対応 - 避難後の対応 - 避難後の対応</p>	<h4>【災害時の命を守る行動】</h4> <ol style="list-style-type: none">1. 避難開始のタイミング - 地震発生時の対応 - 避難経路の確認 - 避難場所の確認 - 避難用品の確認 - 避難時の行動指針の確認2. 避難時の行動指針 - 避難開始のタイミング - 避難経路の確認 - 避難場所の確認 - 避難用品の確認 - 避難時の行動指針の確認3. 避難後の対応 - 避難後の行動指針 - 避難後の対応 - 避難後の対応 - 避難後の対応 - 避難後の対応 <p>このように、災害時の命を守る行動は、避難開始のタイミング、避難経路の確認、避難場所の確認、避難用品の確認、避難時の行動指針の確認です。</p>

④ リピート率を上げる ～また来たいと思ってもらえる大会に～

次に新しい学校に参加いただくのもありがたいのですが、私としては今参加している学校に再び参加してもらえようしたいと考えています。そのためには、魅力ある練習会や練習試合を企画することが大切です。自分のチームの強化だけにこだわってしまうと効果は高いが短命で終わる可能性が高いと思っています。全ての参加校や参加選手にとって良い刺激や思い出、また来たいと思うような取り組み（組み合わせなど）をギリギリまで模索する。物理的に不可能なことも多いが少しでも周りに目を向ける、気を配る姿勢が大切だと感じます。そして、そのようなことを生徒たちに伝えることは生徒たちの将来の社会生活でとても重要な体験にもなりうると思っています。自分の利益だけではなく、共存共栄することの大切さや意義を学ぶ機会にもしたいと思っております。



「まとめ」

部活動と復興・地域貢献はとても難しいようで実はいろいろな事柄をひもといて行くと十分可能なことだと感じています。同時に部活動を競技成績の向上やただの一競技の発展だけに終わらせたらもったいないとも思っています。人が集まるということには大きな力が生まれます。そのことを認識して、情報提供・共有することは必ず大きな財産になると思っています。人と人が出会うことは、違う文化を知ることは、きっと世界平和につながります。知っている人かと思えば必ず人は情が出るものです。新聞の記事でも、ニュースでも知らないと他人事ですが、知っている土地や人だったり、知っている国の話であれば皆関心を持ち自分のことのようにとらえます。これが、とても大事だということを生徒達にも伝えたいと思っています。いろいろな文化そしていろいろな人種によって世界は作り上げられています。私たちは東日本大震災の後に多くの他国や他の都道府県の方々に励まされ、支援をいただきながら、ここまで生活して来ました。あの時に大切だったのは人とのつながりでした。当時のいろいろなエピソードが飛び交う中、誰かのためと思い、命を削って福島を守ってくれた人たちがたくさんいます。色々な分野で人とのつながりの輪を広げ、皆で共存共栄していく取り組みを子供達に伝えていくことが、東日本大震災を経験した私達の役目と感じています。

